Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-06-19

秋成の『伊勢物語』六段「芥川」理解と物語創作の関係

原田，隆伸

(Citation)
國文論叢,56:1-14

(Issue Date)
2021-03-31

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81013019

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81013019

秋成の『伊勢物語』六段「芥川」理解と物語創作の関係

原田隆伸

一、問題の所在

秋成の散文作品の中には、『伊勢物語』から影響を受けたものが多く存在している。その利用の仕方は、語句引用や話全体の筋を利用するものなど様々である。[1] 端的な例として『癇癖談（くせものがたり）』があり、その題や構成、文辞が『伊勢物語』から影響を受けているのは、明らかである。[2] その『伊勢物語』の中でも特に六段「芥川」（以下、「芥川」）は、秋成の作品中で数多くの利用が認められる。具体的には、『諸道聴耳世間狙』二之巻三回「呑こみは鬼一口の色茶屋」[3]や『雨月物語』「吉備津の釜」、『癇癖談』が既に指摘されており、[4] また『藤簍冊子』巻三「秋山記」にも利用が認められるだろう。このことは、秋成が「芥川」から大きな影響を受けて物語を創作しているということを指し示している。

また、秋成は『伊勢物語』を用いて物語を創作するだけではなく、『伊勢物語』自体の注釈も試みている。その注釈は、『雨月物語』刊行の安永五（一七七六）年に先行する安永二（一七七三）年の加島村居住時代から始まっており、『伊勢物語考』が香具波志神社に写本として残っている。[5] さらに、寛政五（一七九三）年には、賀茂真淵『伊勢物語古意』（以下、『古意』）を刊行する際に、『豫之也安志夜（よしやあしや）』を附刻している。

このように、秋成にとって『伊勢物語』研究と『伊勢物語』を利用した物語創作とは車の両輪のような関係であり、有機的なつながりがあると考える。[6] 先行研究では、「吉備津の釜」において正太郎が磯良に殺される場面が、「芥川」を利用している指摘は数多くなされ、[7] さらに秋成の作品のみならず多くの近世作品において鬼が人を食うという話形の物語が創作されたことから、秋成の作品についても、「芥川」だけではなく、『今昔物語集』等、鬼に人が食われるという話形を持つ作品が典拠として指摘されている。しかし、秋成の『伊勢物語』理解を踏まえた「芥川」利用の研究については、いまだ考察の余地があると考える。

本稿では、『古意』やそれ以前の注釈書と稿本『よしやあしや』ならびに刊本『豫之也安志夜（よしやあしや）』を比較することで秋成の「芥川」理解の様相について指摘し、その「芥川」理解と創作との関係について考察する。この考察を通して、秋成は創作する作品の性格

によって、自らの「芥川」理解を使い分けていたと述べる。さらに「芥川」の典拠利用として従来から指摘されていた作品に加え、「秋山記」の存在を新たに指摘し、その叙述方法が「吉備津の釜」最終場面と共通していることについて言及する。

二、古典注釈書における「芥川」理解

「芥川」は、男が芥川を越えて連れてきた女を鬼に食われてしまい、「白玉かなにぞと人の問ひし時露とこたへて消えなましものを」[8]の歌を詠む部分と、その部分が実は高子（後の二条后）と業平との話であり、高子の兄の国経と基経が、高子を奪い返したという話の例えだとする部分とで成り立っている。なお、本稿では物語部分を「前半部」、物語の説明部分を「後半部」とする[9]。この二つの部分の関係を巡って、荷田春満『伊勢物語童子問』（以下、『童子問』）に先行する注釈書では、いずれも「後半部」を物語の事実だと解釈し、「前半部」は「後半部」に書かれている事実をモチーフにして創作された部分だと理解されてきた。次にその例として、細川幽斎『伊勢物語闕疑抄』（以下、『闕疑抄』）、北村季吟『伊勢物語拾穂抄』（以下『拾穂抄』）、契沖『勢語臆断』における「芥川」の注釈を参照する。

(1) 細川幽斎『伊勢物語闕疑抄』における「芥川」注釈

『闕疑抄』では、「此段、殊に作物語也。えうまじかりけるは、得がたき女也。二条の后の事なり」と述べ、「芥川」に登場する男が盗んだ女とは、二条后のことだとしている。また、「鬼はや一口にくひてけりとは、人のつれて行て、女のなき体也。此事おくに委し」とし、鬼が一口に女を食べてしまったというのは、人が女を連れて行って、その女がいなくなってしまったという有様のことで、それについては後の「後半部」に詳しく書かれている、としている。また、「白玉か」の歌に関して、「此、白玉かの歌、『新古今』には哀傷の部に入たり。実に鬼もくはざれ共、哀傷に見るは、真に鬼くひてなき物にして入たる也」と述べ、『新古今和歌集』哀傷の部にこの歌があるのは、実際に鬼が女を食べたわけではないけれども、本当に鬼が女を食らい、亡き者にしたとして入集したためだと『闕疑抄』では解釈している。そして、「後半部」については「是は、作者の詞也」としている。

すなわち、「後半部」は作者によって書かれた事実であり、「前半部」はその事実の例え話であると『闕疑抄』では理解している。

(2) 北村季吟『伊勢物語拾穂抄』における「芥川」注釈

『拾穂抄』では、牡丹花肖柏『伊勢物語肖聞抄』を引用し、「肖 女をとりかへしたる人を鬼といへり」と述べ、「後半部」に書かれている二条后を取り返しに来た兄たちのことを、「前半部」において登場する鬼というのだと解釈している。また、「白玉か」の歌に関しては先に引用した『闕疑抄』での注釈を引用している。さらに「鬼はや一口にくひてけり」についても「女をひとにうばゝれたるを鬼にくはれたるにたとふる也 玄同」として、『闕疑抄』の理解を示している。「後半部」に関しても『闕疑抄』を引用し「是は、作者の詞也」としている。

『拾穂抄』においても、「前半部」を「後半部」の例えだとする『闕疑抄』等の旧注を追認する態度で「芥川」についての理解を示

している。

(3) 契沖『勢語臆断』における「芥川」注釈

契沖『勢語臆断』では、「後半部」を「これより作者の注也」とした上で次のように述べている。

それをかく鬼とはいふなりけりとは、此作者みづからかきて、かく注してまことにあらぬ事をあらはせるや。業平の自記などにかゝれたるを、今その作りていへる事をあらはすや。

「それをかく鬼とはいふなりけり」と書いて注を付することによって「前半部」の内容は事実ではないということを表したのだろうか。また、業平の日記などに書かれたものを、物語に作り変えたということを明らかにしたのだろうかとしている。

つまり、作者自らが「後半部」を書くことによって、業平と二条后との出来事をモチーフにして「前半部」が創作されたということを明らかにしたと契沖は解釈している。

(4) 荷田春満『伊勢物語童子問』における「芥川」注釈

先に引用した注釈では、「後半部」が物語の事実であり、「前半部」は例え話であるとする解釈がなされていた。一方、『童子問』ではそれらの注釈を批判し次のようにある。

いせ物語をたすけて見るべき一案あり。それは、本文と注者とを別にみる案也。此一案によれば、すべて業平の事にあらざるを、注文をくわへて、自注のやうにみせたるより、先達、悉皆まどひて、むかし男を業平と決する邪説、出来る成べし。其一案によれば、此段も「ゐてこし女もなし。あしずりしてなけども、かひなし」といふまでを物がたりの本文としてみる時は、業平の事にはならず、只むかし男の物がたりに成なり。しかるを好色の者、自注のやうに詞をくわへて、「是は二条の后の、いとこの女御の」などいふ注を添たるより、本文にぬすみ出したる女を二条后とし、此男をなり平とはする也。これ、注は、後の人の筆とすれば、いせ物がたり難なし。（中略）注に「二条の后に忍びてまいりけるを」など、いふ詞を作者の詞とするより、罪人あまた出来るなり。是、いせ物語の作者を助る僻案の一案也。後代、此僻案にしたがふ人有べし。

「芥川」を解釈する案として、「前半部」の作者と「後半部」を付した者とを別の人物として考える案があり、その案に従って「芥川」を解釈すれば、「前半部」に登場する男は業平ではなく、ただの「昔男」となり、難なく読むことが出来る。しかし、後世の人が「後半部」を「前半部」の作者が書いたかのように見せることによって、「昔男」を業平とする邪説が生じたのであり、「後半部」と「前半部」との作者を同一人物とする案に従う者が多いと述べている。

(5) 五井蘭洲『勢語通』における「芥川」注釈

五井蘭洲『勢語通』においても、作者と別の者が「後半部」を付したとする注釈がある。以下に引用する。

これ註者の書加ふるところ、論ずるにたらず。これを実とするより、種々の惑説おほく出来るなり。下らうの釈、いまだ委敷かんがえず、僧臘より転じ来れりと見ゆるなり。

「後半部」は、注を付した者が書き加えたのであって論じるに値せず、その「後半部」をも本文としたことによって様々な説が出てきたのだとしている。

蘭洲は『勢語通』序文において、「このものがたりは、在原のなり平の中将のことを主として書なり」としながらも、「男女のあるまじきみそかごとを書しは、おほくは作りこしらへたることにて、実事にあらず。」と述べており、「芥川」の解釈については、『勢語臆断』等の注釈を追認せず、『童子問』の注釈と同様の解釈を示している。

(6) 賀茂真淵『伊勢物語古意』における「芥川」注釈

『古意』では『童子問』、『勢語通』を踏襲し次のように述べている。

かく鬼にくはれたるをいふは、むかし物語の常にて、しかる事もあらでは興なき故也。たゞ此文の如く、鬼にくはれしと意得べし。左の裏書はことわりなし。

このように、鬼に人が食われたということを描くのは物語の常であって、そういう出来事でも起こらなければ面白くないからだとし、ただ鬼に食われた話だと理解するべきだとしている。また、「左のうら書はことわりなし」として「後半部」を道理がないものとしている。[10]

ここまで、『よしやあしや』に先行する「芥川」の注釈を見てきた。旧注ならびに『勢語臆断』は「後半部」を『伊勢物語』の作者による自注だと解釈する。一方、『童子問』、『勢語通』は「後半部」を後人が補筆した物だと解釈する。『古意』は「後半部」を蛇足とした上で、鬼が女を食うという出来事を「芥川」の面白さとして捉えている。次に秋成の「芥川」解釈を検討する。

三、秋成の「芥川」理解

(1) 刊本『豫之也安志夜』における「芥川」理解

刊本『豫之也安志夜』では、次のようにある。

さてこゝのうら書に、二条后のいとこの女御の許におはせしを、偸みて出たりけるを、兄人たちのとりかへし給てふ事も、そのかみにいひつたへし事のありしかば、こゝには書加へけん。古事談に、業平朝臣二条后を盗て宮仕以前将に去らむとするの間、兄弟達昭宣公等追至て奪い返すの時、業平の本鳥を切り云々、仍て髪を生ずるの程、歌枕を見と称て関東に発向す云々。この書は実も虚もえらばず、むかしの口碑どもを聞きしまゝに書集たる物なれば、たしかなるより所とはすべからねど、事のついでに出だすのみ。それを注にとう出でて、本文をいたはらざるは、拙きものぞ。

さてここの「後半部」にある、「二条后がいとこの女御の許にいらっしゃったのを、業平が盗み出したのを、后の兄たちが取り返しなさった」ということもその時代に言い伝えられたことがあったので、ここに書き加えたのだろう。古事談に「業平朝臣が二条后を盗み出てまさに去ろうとするのを后の兄たちが追い付いて后を奪い返し、業平の髻を切ったとか、それで、業平の髪が生えるまで歌枕の地を見ると称して関東に行くとか」とある。『古事談』は本当のことも嘘のことも考えず、昔の言い伝えにあるものを聞いたままに書き集めたものなので、確かなるよりどころにす

るべきではないが、ことのついでに業平と二条后との話を出しただけだ。その部分を対象として注釈に取り出して、本文をぞんざいに扱うのは拙いことだと述べている。

ここで言及されている『古事談』とは、巻二の二八「業平、小町の歌に下の句を付する事」のことで、業平が関東に下向した際の奥州八〇嶋での話である。そこの野中の髑髏から「秋風の吹くにつけても穴目〳〵」という上の句を詠う声が聞こえ、業平はそれを奇怪に思う。すると、ある者が「小野小町が関東に下向し、ここで死んだ」とかいう話を業平にする。業平はその話を聞いて哀れに思い、「小野とはいはじ薄生ひけり」という下の句を付ける。なお、この話の冒頭部に業平と二条后との密通の話が語られる。

『古事談』「業平、小町の歌に下の句を付する事」冒頭部の業平と二条后の話は、『古事談』が書かれた当時において語り伝えられていたことなので、ことのついでに書き加えられたのだと秋成は解釈している。

すなわち、「芥川」についても『古事談』と同様に「芥川」の「後半部」が書き加えられた当時における、業平と二条后との噂があったので、ことのついでに書き加えられたのだと秋成は解釈しているのだろう。そして、「後半部」に注目して本文をないがしろにするのは拙いことだと述べており、「後半部」を除いた「前半部」までを本文としてそのまま解釈すべきだと述べている。この解釈は、『童子問』、『古意』、『勢語通』を追認していると考えられ、「後半部」をも本文と見なす『勢語臆断』等とは全く別の解釈を示している。このことから、『膽大小心録』で[11]「契沖の古語をときし書どもをあつめてよんたれど、猶所〻にいぶかしい事が有て」の一つには、『勢語臆断』の「芥川」解釈も含まれていたことが推定される。

(2) 稿本『よしやあしや』における「芥川」理解

稿本『よしやあしや』本文ならびに「上欄書き入れ部分」においても、先に引用した刊本『豫之也安志夜』と同様の注釈が確認できる。「後半部」について次のようにある。

是も後の人の注とは見ゆるか、とりわけて記者の意をしらざる人の書る也。決してとるべからず。

此段を、今昔物がたりに、在原中将、妾を鬼の為に食われし語とて、其文にも、かの女ぬすみて、北山科の辺の、古き山荘の、あれて人も住まざりけるか、……とありて、又雷も鳴とゞまり、夜も明にけり。しかれども女声もせざりければ、中将あやしみて□□(かへカ)りみるに、女□(ムシ)首と異類ばかりのこりたり云〻、これも其比の世説をしるし給へば、ここも同じ世説を、さま〴〵といひはやしたると見えたり。さるから此注文いよゝわろし

（上欄書き入れ部分）

「後半部」を後世の人が書いた物だとし、決してその部分を「芥川」解釈に用いてはならないと述べている。「上欄書き入れ部分」でも、「後半部」はその部分が書かれた頃の噂話を書き記したものであり、「わろし」として否定している。

さらに、同じく稿本『よしやあしや』では、「おにはやひとくちにくひてけり」の注に「此鬼にくはれたるを、とかくに理をつけていふは、こゝの文章に興なし。唯化鬼にとられたるにて、物が

たりはおもしろし」とあり、秋成は女が鬼に食われるという部分を、物語の面白さとして捉え、「前半部」を「芥川」の面白い部分として評価している。この評価は、『古意』に「かく鬼にくはれたるを云は、昔物語の常にて、しかる事もあらでは興なき故也」とあるのを追認していると考えられる。[12] このような秋成による真淵追認の態度は、『よしやあしや』「此鬼にくはれたるを、とかくに理をつけていふは、こゝの文章に興なし」の「とかくに理をつけていふ」という部分にも見いだせ、その真淵追認の態度には二通りの解釈の可能性があるだろう。一つは次のとおりである。

「とかくに理をつけていふ」の「いふ」の主体は、「芥川」本文の「後半部」または契沖等の注であり、「鬼に食われた」という部分の叙述を例え話としてもっともらしく説明する態度を、秋成は「とかくに理をつけていふ」と非難したとする解釈の可能性である。

このように真淵をそのまま追認したとする解釈ができる一方で、『よしやあしや』当該部分に関して、真淵を追認しながらも秋成独自の観点で注釈が加えられたと解釈できる可能性もあると考える。次に詳しく述べる。

女が鬼に食われるというのは昔物語の話形の一つであって、そういうことがなくては面白くないと述べる真淵に対して、秋成は、鬼に女が食われてしまったという部分について「芥川」本文があれこれと順序立てて説明をしていたとしたら面白みはないと述べている可能性である。すなわち、「鬼はや一口にくひてけり」という簡潔な描写をしていることを秋成は面白みとして評価している可能性がある。[13]

この注釈は、「芥川」本文「はや夜も明けなんと思ひつゝゐたりけるに、鬼はや一口にくひてけり。あなやといひけれど神鳴るさわぎにえ聞かざりけり。」という箇所に対する『古意』の注釈を受けてなされたものだと考える。以下にその注釈を引用する。

さて、此所は詞のたらはぬ様に聞ゆるは落たる語の有にや。今助けていはゞ、あなやといへるこゑのきこえつれど、物のまぎれに、さる事ならんともえ聞かざりしてふ意とすべき歟。且此鬼はや一口にとふよりきかざりけるまでは落著を先いへり。さて、次に、理をとく文なり。

「芥川」本文の叙述が言葉足らずのように思えるのは、落ちてしまった語があるからなのだろうか、考えるに「あなや」という声が聞こえたが、鬼に食われたという事態が起こってしまっても雷の音などに紛れてしまって男は聞くことができなかったという意味で捉えるべきか。また、本来は、「ゐてこし女もなし」以下を先に記し、その後に「鬼はや一口に」と続きを記すべきところを、「鬼はや一口に」から「聞ざりける」までの物語の帰結部分を先に記し、次に「率てこし女もなし」以下、帰結にいたる道筋を記していると述べている。[14] すなわち、連れてきた女がいなくなってしまったがこれは鬼に一口に食われてしまったからだ、と記すべきところを順序を逆に記していると真淵は述べ、「落たる語の有にや」と疑問を呈している。一方で、秋成は「芥川」における簡潔な表現をむしろ面白みとして評価する視点があり、それが『よしやあしや』当該部分に反映されている可能性があるだろう。また、『古意』には「芥川」の「行さき遠く、夜も更にければ、鬼ある処ともしらで、神さへいみじう鳴、雨もいたうふりければ」という

箇所に対して頭注で次のようにある。

凡文にはさま〴〵の例あるを、古書もて深く意得おきてかくべし。是を習ひといふ也。且ことの多きをば、いかにも短かくて聞ゆるやうにし、短き事の時、詞長く飾る様に意得べき也

おおよそ、文には様々な例があるというのを、古書を参照し、それを心得て書くのが適当である。これを「習い」というのだ。また、多くの言葉を尽くさなければ書けないようなことを短く聞こえるようにし、端的に表せることを言葉を尽くして飾る様に書くと心得るのが良いと真淵は述べている。秋成が「ことの多きをば、いかにも短かくて聞ゆるやうに」すべきだとする真淵注釈を「鬼はや一口にくひてけり」の注釈に援用しているとするならば、「とかくに理をつけていふは、こゝの文章に興なし」について、「芥川」本文があれこれと順序立てて説明をしていたとしたら面白みはないとする解釈の可能性も否定できないだろう。

四、秋成の「芥川」利用

秋成の「芥川」理解について、先に述べたとおりである。それでは、その「芥川」理解と物語創作とはどのような関係にあったのか次に考察する。

(1)『雨月物語』「吉備津の釜」における「芥川」利用

「吉備津の釜」最終場面において、典拠指摘は数多くなされており、「芥川」や『今昔物語集』、『日本霊異記』などがあげられている。[15] その最終場面は次のように描かれている。次に引用するところは、磯良の祟りから逃れるために四二日間の物忌みをしている正太郎であるが、遂にそのもの忌みも明けたと勘違いをし、隣屋にいる彦六に話しかける場面である。[16]

長き夢のさめたる如く、やがて彦六をよぶに、壁によりていかにと答ふ。おもき物いみも既に満ぬ。絶て兄長の面を見ず。なつかしさに、かつ此頃の憂怕しさを心のかぎりいひ和さまん。眠さまし給へ。我も外の方に出んといふ。彦六用意なき男なれば、今は何かあらん、いざこなたへわたり給へと、戸を明ける事半ならず。となりの軒にあなやと叫ぶ声耳をつらぬきて思はず尻居に座す。

正太郎の「あなや」という声を聞いた彦六は、正太郎が物忌みをしていた家へと行く。しかし正太郎はおらず、周りにも何もない。彦六がともしびを掲げると「戸腋の壁に腥々しき血濯ぎ流て地につた」っており、そこには正太郎の死体も骨もなく髻のみがぶらさがっているだけであった。

この引用箇所に先行する、「此鬼世をさりぬるは七日前なれば、今日より四十二日が間戸を閉ておもき物斎すべし」という陰陽師の言葉や、物忌み中の描写である「かの鬼も夜ごとに家を繞り或は屋の棟に叫びて忿れる声夜ましにすざまし」という地の文からも分かるように磯良を「鬼」としており、鬼一口のことをほのめかしている。[17] さらに、「芥川」本文のような二部構成（「前半部」「後半部」）を用いて創作しているわけではない。このように、秋成は何かの例え話としてではなく、鬼（磯良）が正太郎を食う話として「吉備津の釜」を描いており、『古意』の「芥川」理解に共鳴する「芥川」観を、「吉備津の釜」執筆時には既に持っていたと

考えられる。そして、その「芥川」理解を創作に反映させたと考える。しかし、この「芥川」理解は、「吉備津の釜」に無条件に反映されていたわけではない。

例えば、寛政三（一七九一）年脱稿『癇癖談』には、「鬼あるところともしらで」「あなやといひけれど」「男あしづりして泣ども甲斐なし」など「芥川」の「前半部」に確認できる文辞を用いている部分がある一方で、「それを鬼ともいふなりけり」という「後半部」に見られる文辞をも用いている部分がある。このような、「後半部」の文辞を用いた物語の創作方法は、「前半部」のみを「芥川」の本文として理解する秋成の「芥川」理解とは乖離したものである。つまり、『癇癖談』においては、あえて「芥川」の「後半部」を利用した物語創作を行っており、秋成は創作物の性質によって『伊勢物語』の構成を使い分けていたと考えられる。したがって「吉備津の釜」について言えば、秋成が学問研究を反映した作品として『雨月物語』を創作していたからこそ、『古意』を追認した態度をとり、「後半部」に対応する部分を設けなかったのだと考える。

ただし、「吉備津の釜」に見られる秋成の「芥川」観は、『古意』と共鳴するものだけではない。稿本『よしやあしや』において、女が鬼に食われる部分に関し、「鬼はや一口にくひてけり」という簡素な表現のみで記している部分を、「芥川」の面白みとして評価している可能性があると先に述べたが、そのような評価の観点が「吉備津の釜」執筆時にもあった可能性がある。それゆえに、正太郎が磯良に殺される場面において、その様子を具体的に書くということをせず、「あなや」という正太郎の声とその後の凄惨な様子のみをもってして、正太郎が磯良に殺されてしまったということを表現したのだと考える。

(2)『藤簍冊子』巻三「秋山記」における「芥川」利用

「秋山記」は『藤簍冊子』巻三に収められている紀行文で、安永八（一七七九）年、城崎旅行直後の成立である。[18] 刊行は文化二（一八〇五）年（巻三までの三冊本）と文化四（一八〇七）年（六冊本）である。「秋山記」に関する先行研究は数多くなされ、[19] 例えば本稿でも扱う『伊勢物語』との関係についての論考では、正本綏子氏が「秋山記」冒頭部における『伊勢物語』一六段の利用について指摘している。[20] その他「秋山記」に関する研究としては風間誠史氏が、本稿でも言及する「里人何がし」が物語をする場面について、登場人物である不道徳・ふしだらな娘が讃えられ、神の加護を得ている部分に注目し、そこに秋成の寓意を感じられると述べ、『春雨物語』「死首の咲顔」のヒロインと通じる部分があると指摘する。[21] 村田俊人氏は同じ城崎旅行を題材にした「去年の枝折」と「秋山記」を比較することで、城崎旅行における往路前半部までの行程が『雨月物語』の時代設定に関わる土地の探訪および説話蒐集を目的としていたとし、その中でも本稿と関わる部分として「吉備津の釜」「磯良」を想起させる土地を通っていたと述べ、「秋成が、『雨月物語』執筆時に抱いていた物語の創作に対する意識を『秋山記』執筆時においても保持していた」と指摘する。[22] 森山重雄氏は、秋成は『伊勢物語』の文体で「里人何がし」の語る物語を書いているとし、その物語は『日本書紀』に登場する「大口の真神」を用いた「古代的・鄙的でもある物語に、勢語的表現

を意識的にとったもの」だと指摘する。[23] ただし、その指摘は『伊勢物語』が男性を示す際に「おとこ」と一貫して示していることを根拠に「秋山記」本文「男いとうれしうて寝にけり」が「勢語的表現である」とするものや、『伊勢物語』同様に「けり」が多用されているとするものなど根拠に乏しい指摘である。そこで、「秋山記」一〇月一一日の記事における、「里人何がし」が秋成の所へ来て語る物語の中に見られる「芥川」利用の様相を具体的に検討する。「里人何がし」が語る物語の梗概は次のとおりである。

城崎の竹野の浜に住む娘は未婚であったが、いつの頃からか下男として働く男と恋仲になった。その仲を悪く思った男の主である翁によって二人は疎遠になってしまうが、娘はなんとかして度々下男の所へ通うようになる。そんなある日、山の峠を娘が越えたところで「大口の真神（狼）」にであう。「大口の真神」がすさまじい形相をして噛みつきそうだったので、娘が必死に助命の嘆願をすると、「大口の真神」は食いつく様子もない。娘はなんとか虎口を逃れる。さて、この娘に懸想する山賤がおり、何度か言い寄るものの、娘には下男がいたのでそれを無視していた。ある夜、娘が下男の所へ通うと聞きつけた山賤は、娘を待ち構えて本意を遂げようとする。すると、「大口の真神」がやってきて山賤を食い尽くしてしまい、娘はその危機から逃れた。

次に引用する部分は、娘が初めて「大口の真神」に出くわす箇所である。[24]

さみだれのはれまある夜、れいのたど〳〵しからでこえくるに、山のたむけ過るほど、草たかくしげりあひて、風そよげるよと見る〳〵、いはほなりと見しもの、むく〳〵とおきあがりて、こなたざまにむかふを見れば、あないみじ、あなおそろし、大口の真神といふものなりけり、あなやといへど、人げとほければ、いかゞはせむ、たゞわななく〳〵、しりへにゐざるを、神ゆるすまじき眼つきして、くひつくぞと見る、

娘が馴れた足取りで下男の所へ行く途中、峠を越えたあたりで「大口の真神」に出くわす。娘が「あなや」と言うけれども、人気のないところなのでどうしようもなく、ただわなないていると、この「大口の真神」が噛みついてきそうな形相で見ている。この後、娘は「大口の真神」に助命を嘆願し、神もその嘆願を聞き入れたのだろうか、娘に食いつくことはなかった。

この箇所において、「芥川」を想起させる点は以下のとおりである。①「大口の真神」に出会った娘が、「あなや」と発する点。②その場所が人気のない所であったという点。これら二点が相まって、「芥川」を想起させるような表現をしている。特に①については、「秋山記」が「あなやといへど」とし、「芥川」が「あなやといひけれど」としているように、「あなや」を用いる際の文辞にも一致が見られる。

先に引用した部分に加えて、娘に懸想する山賤によって娘が襲われ、そこに「大口の真神」が再び現れる場面でも「芥川」を想起させる描写がある。[25]

こゝに人と云べくもあらず、うち〳〵親のゆるせしにぞ、かうしのびにかよふところの侍る、君がおそきみ心に、今はいらへがたくなん、こゝゆるして通させ給へと云、こよひの関守いかで過しやらん、しひてほゐとげんとてこゝに侍つれ、ひたぶるに心づよくは、命うしなひてんと、おそろしき眼し

ていひおどろかしつゝ、つよくとらへたり、命めすともいかでしたがはむ、あが御神〳〵、この仇追たまへとさけぶ〳〵、山賤ことのこゝろもしらねば、猶しひ言きこえむとするを、此をのへより走りくるものゝ有て、山がつがこむらのあたりを、骨までつよくゝひつきたり、あなやとさけびて倒る、女、あが御神〳〵と申す〳〵、山を逃くだる、山がつむなしくゝひつくされしとなむ、いとめづらしきかたりぐさならずやと口とくかたり出たり、

山賤が本意を遂げようと娘を脅す。娘は「命を奪われたとてどうして従うことがあろうか、我が神よこの仇を追い払いください」と叫ぶ。すると、大口の真神がやって来て山賤に噛みつき、娘が逃げている内にこの山賤を食い尽くしてしまった。

この部分において、「芥川」を想起させる部分は以下のとおりである。①山賤に噛みついた「大口の真神」によって、山賤が食い尽くされてしまったという点。②「大口の真神」に噛みつかれた山賤が「あなや」という叫び声を発したという点。

そもそも、この「大口の真神」は『万葉集』巻八・一六三六、巻一三・三二六八番歌に見られ、巻二・一九九番歌には「真神か原」として掲出される。例えば、『代匠記』では『万葉集』巻八・一六三六番歌について「むかし明日香の地に老狼ありて、おほく人を食ふ。土民恐れて大口の神といふ。其の住む処を名付けて大口の真神の原と風土記に見えたり」として『風土記』を引用している。[26] また、この後の注釈部分では「欽明紀」を引用している。他にも『万葉集見安補正』（以下『見安補正』）では「真神之原（マガミノ）」に「欽明記に、二狼の嚙（クラ）あひし所にて、名の義（シ）とはなれり。大口のまかみの原也」としており、「欽明紀」の引用が見られる。[27]『膽大小心録』においても「欽明紀」が言及された後に「清み原を、一の名、真神が原と歌にはよむ。大口の真神が原とよむ也」とある。[28] 一九九番歌に関しては『楢の杣』、『金砂』で注釈がなされ、いずれも『日本書紀』「欽明記」が言及されている。したがって、「大口の真神」という語自体は「芥川」を想起させる語ではなく、「欽明記」や『風土記』、『万葉集』といった古代語として国学者からは認識されており、秋成自身もそのように認識していたと考えられる。

つまり、秋成は「あなやといひけれど」という「芥川」と文辞を一致させた形で「あなや」を用いることによって「芥川」を想起させつつ、「大口の真神」を跡形も残らず山賊を食う存在として用いることで、「欽明記」『万葉集』語彙としての「大口の真神」を「鬼一口」を想起させる語彙へと変化させているのだ。このように、秋成はそれ自体では違う話（欽明記など）を想起させる語（大口の真神）を、他の語（あなや）との取り合わせや話形の利用など、巧みに用いることで、「芥川」を典拠とする作品として「里人何がし」の語る物語を創作したのだと考える。では、この「秋山記」における「芥川」利用と先に確認した秋成の「芥川」理解とのどこに共通点を見いだすことができるのであろうか。以下に考察する。

秋成は、「大口の真神」を何かの例えとして用いるのではなく、山賤を食う存在として「里人何がし」が語る物語の中で用いている。この叙述方法は、「芥川」「前半部」のみを本文とすべきだとする『古意』を追認した秋成の「芥川」理解が反映されていると

考える。ただし、「吉備津の釜」における『古意』享受に言及した際にも述べたように、この利用方法は『古意』を無条件に追認したものではない。「秋山記」には、紀行文でありながら『源氏物語』論が語られたり、様々な古典が利用されたりと和文としての性質があり、そのような作品を創作するという意図を秋成が持っていたからこそ、「芥川」の「後半部」に相当する部分を「秋山記」では設けなかったのだろう。また、「『雨月物語』執筆時に抱いていた物語の創作に対する意識を『秋山記』執筆時においても保持していた」とする村田氏の先行研究も傍証となるだろう。

しかし、「秋山記」創作の際の工夫は『古意』を利用するだけではない。山賤が食い尽くされてしまう部分においては、その描写をせず「山がつむなしくゝひつくされしとなむ」という伝聞のみの簡素な表現を用いている。この表現は、秋成が「吉備津の釜」において正太郎が殺される場面の詳細な描写を行わなかったことを受け継いだものだと考えられる。同じように、狼が何かを食い尽くすという話形を持つ物語に『本朝二十不孝』巻一「大節季にない袖の雨」があるが、その叙述方法は「秋山記」とは様相を異にする。当該箇所周辺の梗概は次のとおりである。

主人公である不孝者、文太左衛門の両親は息子のあまりの不道徳を償うため舌をかみ切り自害するが、その死骸は狼に食べられてしまう。それを知らない文太左衛門ではあったが、両親が自害した所に着くとなぜか足がすくみ目もくらみ、行き倒れてしまった。そこへ狼が現れる。次に引用する場面はその続きである。[29]

二親の亡骸を食ひし狼、又出て、終夜、嬲り食ひ、大かたならぬ、うきめを見せて、その骨の節々、までを、余多の狼くはへて、狼谷の道ばたに、又、人形を並べ置きて文太左衛門が恥を曝させける。

このように文太左衛門をなぶり、食い殺した狼は、並々ならぬ辛い目に遭わせ、その死骸を咥え、道ばたに元の人間の形どおりに骨を並べて文太左衛門の恥を曝したとあり、文太左衛門の死の場面の叙述は簡素な表現とは言いがたい。一方で秋成は「山がつむなしくゝひつくされしとなむ」と叙述するのみである。以上のことから次のことが考えられる。

稿本『よしやあしや』において述べられる、「此鬼にくはれたるを、とかくに理をつけていふは、こゝの文章に興なし」という秋成の「芥川」観の萌芽を、「吉備津の釜」の最終場面だけでなく、「秋山記」においても見いだせる可能性がある。少なくとも磯良が正太郎を食う場面を簡潔に描写したという叙述方法を「秋山記」にも引き継いだという事実は、秋成が「芥川」の簡潔な描写を評価していたということの傍証となるだろう。もちろん、文太左衛門があまりに不道徳なことを行っている報いとして、死の場面に際して先に引用したような叙述を行ったという要素はあるだろう。しかし、「吉備津の釜」で言えば、正太郎も不道徳な人物として描かれているにもかかわらず、死の場面に際して、秋成は簡潔な叙述を行っている。これは、簡潔な描写を評価する態度が創作に反映されていたということである。

すなわち、秋成は和文を創作するという意識の元、『古意』を利用し、さらに「吉備津の釜」最終場面の叙述を引き継ぐことで「芥川」を典拠とする「里人何がし」の語る物語を創作したのだと考える。

五、まとめ

ここまで、次の三点のことを述べた。①秋成の「芥川」注釈の内実を検討することで、「吉備津の釜」、「秋山記」における『古意』追認を指摘した。②また『古意』を深化させ、簡潔な描写を評価するという秋成の「芥川」理解が上記二作品に反映されている可能性を述べた。③「秋山記」「里人何がし」の語る物語は「芥川」を典拠としており、その創作は「吉備津の釜」の叙述方法を引き継ぐ形で行われた。②に関しては、先にも指摘したことだが、簡潔な描写を評価するという秋成の「芥川」理解が、解釈の可能性として「よしやあしや」に明言化されていなかったとしても、その評価の観点が「芥川」を利用した「吉備津の釜」、「秋山記」の創作に、言外の内に反映されていた可能性は十分にあるだろう。だからこそ秋成は正太郎や山賊の死の場面に際して、簡潔な叙述を採用したのだと考える。

このように、『伊勢物語』研究と『伊勢物語』を利用した物語創作とが、有機的なつながりを見せていることから、『雨月物語』については怪異小説という認識や、翻案小説としての「読本」であるという認識が文学史においては一般的でありながらも、古典注釈の成果を反映させたという意味での「和文」としての性格もかなり強い。したがって「秋成の和学研究の一環としての『雨月物語』」という視点から近世文学史における『雨月物語』の位置を再構する必要があると考える。

注

（1）鈴木健一氏『伊勢物語の江戸――古典イメージの受容と創造』（森話社、二〇〇一年九月）。

（2）浅野三平氏「三つの諷刺的作品――書初機嫌海・癇癖談・万匂集――」（『国文学解釈と鑑賞』二三巻六号、一九五八年六月）。高田衛氏『完本 上田秋成年譜考説』（ぺりかん社、二〇一三年四月）。

（3）井上泰至氏『雨月物語論――源泉と主題』「『雨月物語』の遊戯性」（笠間書院、一九九九年四月、初出『防衛大学校紀要』六七巻、一九九三年九月、原題「『雨月物語』の表現」）は、『諸道聴耳世間狙』「呑こみは鬼一口の色茶屋」が六段「芥川」の語句を利用していると指摘している。さらに、色茶屋の主「鬼の喜助」に取り立てられる能楽師家嶋与左衛門が付髪を落としてしまう箇所については「付髪で鼓を打つも途中付髪が落ちてしまい、これを拾った後見の生駒新八は、間違えて小鼓の医師石川松庵にこれをつけてしまう。退出の際これが発覚大笑いとなるが、この付髪の趣向は、切髪説話を念頭に置いたものであったろう。」としている。

（4）注（1）に同じ。なお、秋成の「芥川」受容の他、詩歌、絵画、演劇における『伊勢物語』受容についても述べている。

（5）『上田秋成全集』第五巻（中央公論社、一九九二年五月）の日野龍夫氏の解題部分による。なお、『伊勢物語考』は、『伊勢物語』五〇段と一二四段の二段のみを取り上げている。また、近衛典子氏『上田秋成新考 くせ者の文学』「物語の変容――『癇癖談』の位置」（ぺりかん社、二〇一六年二月、初出『国文』（お茶の水女子大学）七七号、一九九二年八月）は、『伊勢物語考』の秋成説が稿本『よしやあしや』に引き継がれていることを指摘している。稿本『よしやあしや』はそのほとんどが、『勢語臆断』・『古意』の説を紹介することに筆を費やしているのにも関わらず、このように

自説を紹介していることに対して、「確言できないためらいを見せながらも、自説に対してこだわる秋成の態度を示すものであろう。」と述べている。

（6）『豫之也安志夜』の特徴に関して、山下久夫氏『秋成の古代』（『豫之也安志夜』の古代幻視――「在五中将物語」の視点」（森話社、二〇〇四年一〇月、初出『論究日本文学』七四号二〇〇一年五月、原題「秋成『豫之也安志夜』の古代幻視」）は、「だいたい秋成の評釈は、万葉評釈書の『楢の杣』や『金砂』をみてもわかるように、語順に沿った注釈や先行学説との学問的なかかわりといった通常の評釈スタイルが重視するあり方からはまったく外れ、自分の文脈を作り上げるために恣意的に切り取る場合が多い。」と述べている。

（7）後藤丹治氏「雨月物語と伊勢、今昔との関係」（『国文学論叢』五巻、一九五五年一一月）。

（8）『竹取物語 伊勢物語』（新 日本古典文学大系所収、岩波書店、一九九七年一月）。なお、当該歌は『新古今和歌集』巻八「哀傷部」にも掲出され、終句は「けなましものを」となっている。

（9）「芥川」の当該箇所の呼称について、山本登朗氏「伊勢物語における散文と和歌――連接形式の意味――」（『伊勢物語論 文体・主題・享受』笠間書院、二〇〇一年五月）は、鬼が女を喰らう部分については「散文部」とし、それが実は高子の兄達のことを指しているとする部分を「補注部」としている。

（10）高野奈未氏「物語の「興」――賀茂真淵『伊勢物語古意』と先行注釈――」（『国語と国文学』九五巻三号、二〇一八年三月）は、『伊勢物語古意』に見られる「興」に注目し、それが、「旧注の『伊勢物語』の捉え方を否定し、さらには師である春満の虚構批判を乗り越え、表現された内容そのものを読むために用いられてきた」と述べている。「芥川」の注釈については、春満が鬼について特に言及しなかったのに対して、真淵は「鬼」の出現そのものを「芥川」の面白みとして捉えていると述べている。

（11）『上田秋成全集』第九巻（中央公論社、一九九二年一〇月）。なお、引用は自筆本による。

（12）日野龍夫氏『上田秋成全集』第五巻（中央公論社、一九九二年五月）は解題部分で、稿本『よしやあしや』について、「七割以上は賀茂真淵の『伊勢物語古意』の引き写し、二割は契沖の『勢語臆断』の引き写し、秋成の創見は一割にも満たない、といった内容の本書は、秋成が本腰を入れて取り組んだ著述では決してなかったであろう。」と述べている。

（13）注（3）に同じ。井上泰至氏は稿本『よしやあしや』の「此鬼にくはれたるを、とかくに理をつけていふは、こゝの文章に興なし、唯化鬼（バケモノ）にとられたるにて物がたりはおもしろし」・「こゝは俗にいう化鬼（バケモノ）ある所ともしらでとの意也」という注釈について、「創見を述べている」と評し、「『伊勢物語』第六段をうつし、正太郎の惨殺場面を具体的に語らなかった体験をふまえたかのごときものと考えられなくもない」と述べているが、そのように指摘するのみで具体的にどのようなところが創見であるのかということについては言及しておらず、詳細な検討がなされていない。

（14）「芥川」当該箇所は次のとおり。「鬼はや一口に食ひてけり。「あなや」といひけれど、神鳴るさわぎに、え聞かざりけり。やうやう夜も明けゆくに、見れば率て来し女もなし。足ずりして泣けどもかひなし。」（本文は『竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』日本古典文学全集所収、小学館、一九八五年九月による）

（15）鵜月洋氏『雨月物語評釈』（角川書店、一九六九年三月）。

（16）『上田秋成全集』第七巻（中央公論社、一九九〇年八月）。

(17) 注(3)に同じ。
(18) 『近世歌文集下』(新日本古典文学大系所収、岩波書店、一九九七年八月)中村博保氏の校注による。
(19) 飯倉洋一氏「秋成和文の生成『文反古』を中心に」(『秋成文学の生成』所収、森話社、二〇〇八年二月)。
(20) 正本綏子氏「『秋山記』冒頭における『伊勢物語』第一六段踏襲の意図」(『国文学攷』一五七巻、一九九八年三月)。
(21) 風間誠史氏『近世和文の世界 蒿蹊・綾足・秋成』「『秋山記』の世界」(森話社、一九九八年六月)。
(22) 村田俊人氏「上田秋成の城崎行――『雨月物語』所縁の地の探訪」(『日本文藝研究』六〇巻、二〇〇八年一一月)。
(23) 森山重雄氏『秋成 言葉の辺境と異界』「『秋山記』を読む」(三一書房、一九八九年五月)。
(24) 『上田秋成全集』第一〇巻(中央公論社、一九九一年一一月)。
(25) 注(18)に同じ。
(26) 『契沖全集』第四巻(岩波書店、一九七五年七月)。
(27) 『上田秋成全集』第四巻(中央公論社、一九九三年二月)。「解題」によれば、『見安補正』は秋成の門人にあたる池永秦良の著作だが、その死に際して「秋成は秦良の遺稿を全面的に改稿したのである」とあり、秋成の「真神」認識を示せるものとして本稿では引用した。
(28) 注(11)に同じ。引用は自筆本による。なお、引用箇所は『上田秋成全集』に所収されている『膽大小心録』の異本には、掲出されない。
(29) 『井原西鶴集 二』(日本古典文学全集所収、小学館、一九七三年一月)。

※『伊勢物語闕疑抄』(寛永一九年刊)は『伊勢物語古注釈大成』第五巻(笠間書院、二〇一〇年二月)、『伊勢物語拾穂抄』は竹岡正夫『伊勢物語全評釈』(右文書院、一九八七年四月)、『勢語臆断』は『契沖全集』第九巻(岩波書店、一九七四年四月)、『伊勢物語童子問』は『伊勢物語古注釈コレクション』第四巻(和泉書院、二〇〇三年六月)、『勢語通』(懐徳堂本)は『伊勢物語古注釈コレクション』第六巻(和泉書院、二〇一一年一一月)、『伊勢物語古意』は『伊勢物語古注釈コレクション』第五巻(和泉書院、二〇〇六年一〇月)、稿本『よしやあしや』ならびに刊本『豫之也安志夜』は『上田秋成全集』第五巻(中央公論社、一九九二年五月)による。

(はらだ たかのぶ/藤枝明誠中学校・高等学校講師)